

松謡会10周年記念 民謡研究発表会プログラム

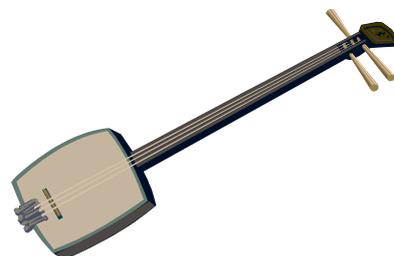
日時 2月27日(水) 午前10:30~11:30

会場 横川地区市民センター

★ご挨拶 松謡会代表(民謡指導) 楯石義男

★演奏

1. 「南部牛追い唄」 唄 楯石義男
岩手県の民謡。秋田県境に沿って高い山々に囲まれた沢内盆地もまた南部藩の穀倉地帯だった。この沢内地方でとれた米は、牛の背にのせられ、藩の米倉のある盛岡などに運び込まれていた。その際牛方たちが歌った道中唄である。
2. 「武田節」 唄 藤田恭寿
本来は三橋美智也が歌唱する民謡調流行歌、または新民謡と呼ばれるジャンルで、著作権がある。山梨県の民謡が少ないこともあり、山梨県民謡とみなされることがある。武田信玄とその配下の武士たちの出陣の様子を歌にしたもので、曲の間には風林火山の文句を歌う詩吟がはさまれている。
3. 「貝殻節」 唄 藤田恭寿
鳥取県の民謡。県中北部鳥取市気高(けたか)町の沖合いでは、かつて10年または20年、30年に一度、大量のホタテガイが発生する年があり、地元ではこれを「カイガラ年」とよんできた。そのホタテガイ大発生年には沿岸の漁師たちが、ジョレンとよばれる馬鍬(まぐわ)のような漁具を海底に沈めては引き上げて貝をとっていた。その際、船をこぐ漁師たちの歌った労作唄が『貝殻節』である。その作業は重労働だったので、歌詞にも「何の因果で……」のつぶやきが盛り込まれたという。
4. 「りんご節」 唄 小森啓子
青森りんごの宣伝のために、成田雲竹が作った新民謡。りんごを題材にした「リンゴの唄」や「りんご追分」などは、一世を風靡したが、地元からの唄ではなかった。そこで南津軽郡藤崎町のりんご生産者が成田雲竹を訪ねて、りんごの唄を依頼。雲竹は歌詞と曲を作り、高橋竹山が伴奏を付けて、昭和29年に発表。
5. 「鬼怒の船頭唄」 唄 小森啓子
毎年6月に、鬼怒の船頭唄全国大会が行われている。鬼怒の船頭唄は、江戸時代に板戸河岸で働く船頭たちに愛唱されていたと伝えられる。H24の全国大会は、清原体育館を会場にして、約200名の参加者が「鬼怒の船頭唄」を唄ってのどを競った。
6. 「斎太郎節」 唄 高城弘志
宮城県松島湾沿岸一円の民謡。同地方でカツオ漁の大漁祝い唄として歌われてきたもので、その源流は岩手県陸前高田市気仙町周辺の木遣唄(きやりうた)『気仙坂』である。それが、重い物を移動する唄として、また神に捧(ささ)げる祝い唄として東北地方一円に広まった。そして『サイドヤラ』とか『サイタラ節』とよばれていたものに『斎太郎節』の文字をあてた。
7. 「江差馬子唄」 唄 高木房美
北海道の民謡(新民謡)。



8. 「喜代節」 唄 横尾幸三

秋田県仙北郡の祝い唄。一同、威儀を正し、手拍子を打って斉唱した。元唄は「ざっくら節」と呼ばれたで、既に応永年間(1394-1428)に唄われていた

9. 津軽三味線演奏 演奏 照内一明、横尾幸三

「津軽じょんがら節(新節)」

越後の唄をの警女や座頭などが津軽へ持ち込んだ。津軽坊など、盲目の芸人達はその唄を磨き上げ、さらに白川軍八郎、高橋竹山、木田林松栄などの三味線の名手たちが伴奏を華麗なものとした。明治20(1883)年頃までの節を旧節、昭和初期までの節を中節、昭和3(1928)年頃から唄い始めたものを新節と呼んでいる。曲名のいわれは不明だが、一説によると、慶長2(1597)年、津軽藩藩主為信は、南津軽の浅瀬石(あぜし)城主・千徳政氏を滅ぼした。為信が、千徳家の墓まであばこうとしたため、菩提寺の僧・常縁(じょうえん)は激しく抗議した。常縁は追われる身となり、遂に浅瀬石川に身を投じて果てる。村人たちは同情して、この悲劇を唄にした。常縁が身を投げた場所を常縁河原と呼び、それが上河原になり、じょんからになったと伝えている。

「津軽アイヤ節」

江戸時代、熊本県牛深(うしぶか)港で唄われていたハイヤ節は、北前船の船頭たちによって各地の港に伝えられた。北前船は大阪から下関を回り、北海道の松前に向かう。「ハイヤ節」は、津軽領では鱒ヶ沢や青森、野辺地などの港へ移入され、港の女たちが酒席で盛んに唄っていた。アイヤは、唄い出しのハイヤがなまったもの。初めは「南部アイヤ節」程度の素朴なものであったが、津軽三味線の伴奏に助けられ、技巧的な唄になっていった。「津軽じょんがら節」「津軽よされ節」と共に、津軽の三つ物といわれる。

10. 尺八演奏「松前追分」 演奏 楯石義男

北海道・松前は、道南にあって蝦夷島主としての地位を保った松前氏の城下町である。明治の廃藩になり政治が札幌に移るまで、北海道の拠点であった。その「松前」を唄った追分である。明治30年代の文献には「北海道の追分節は昔より「松前追分」と称しその名頗る世に高し、歌節は優美にして深淵、特に江差を以って本場となすがため、また「江差追分」ともいう・・・」と、ある。

※「追分」という民謡は、信州中山道と北国街道の分岐点「追分宿」(長野県北佐久郡軽井沢町)で、飯盛女達によって歌われた「追分節」は、全国に伝播した。

※馬子唄と馬喰(ばくろう)唄について

双方の区別を曖昧にしている原因に、馬方という呼称の存在がある。馬方とは馬を取り扱う人をさすが、だいたい馬喰のことを指している。唄の方でも馬方節と「節」がつくが、馬子の方は馬子唄と「唄」がつき、いずれも近年作られた新民謡であり、昔から伝承されたものではない。また馬子唄は、馬子達が仕事の道中、退屈をしのぐための唄であり、歌詞の種類は何でもよかったようだ。

★閉会のご挨拶 (三味線指導) 照内一明



解説は、菊池淡狂著「民謡百景」(出版:日本民謡協会)及び、該当ホームページより引用しました。

(文責 横尾 幸三 2013/2/25)